

藤樹書院に過る（伊藤東涯）

江西書院聞名久 五十年前訓義方
今日始來絃誦地 古藤影掩舊茅堂

解説 東涯が藤樹書院を訪れて藤樹を敬慕してよんだ詩。

江西の書院名を聞くこと 久し

五十年前義方を訓う

語釈 ※藤樹書院Ⅱ中江藤樹が生地の小川村で教化を垂れ、その跡が藤樹書院と呼ばれた。※五十年前Ⅱ東涯がこの書院を訪ねたのは藤樹没後、七十三年であった。したがって「五十年」は大略の数である。※訓義方Ⅱ子弟を教訓するのに正しい道をもつてすること※絃誦Ⅱ絃は絃歌。誦は講読。中国古代において琴に合わせて書物を朗誦したので読書、学問のことをいう。

今日始めて来る 絃誦の地

古藤影は 掩う 旧 茅堂

通釈 江西の地に残っている「藤樹書院」の名は聞いていた。その書院は今から五十年ほど前に、近江聖人として世間に評判の中江藤樹先生が、人の履み行なうべき正しい道を教えたとされた所である。ようやく望みが達し、今日初めてその昔大勢の弟子たちが詩書を誦読していた地に来て見れば、世に名高い藤が、古木となって影を茂らせ、当時のままの茅葺きの書院をおおって、今も藤樹先生がそこにおられるかのようで、まことに感慨無量であった。